
エレイズとユエ

Lolo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エレイズとゴン

【著者名】

レオナルド

【あらすじ】

連載休止しておりましたが、ひょっこり再開しました。

炎の召喚士フレアで、名前でしか登場しなかつたエレイズの婚約者ゴン。2人の出会いから、ゴンの死までの話。終わりに近付くになるとつれて暗くなること間違いなく、相変わらず恋愛模様の描き方は下手くそです。ちょっと長くなるかと思います。

恋愛小説というより、ファンタジーとして読んでください。

今から7年も前となる。ユエ　ヨナの兄であり、後にエレイズの婚約者^{妃アンセ}となつた男がダグラスの陰謀によつて亡き人となるより3年前。

レミニュエル王国は北に国境を接するセレウデリア王国との国境線に勝利を收め、その戦いで頭角を現した2人の上位魔法兵が上将軍にまで出世した。それがまだ10代のエレイズとウォーレンである。他の追随を許さぬ圧倒的な戦闘能力を持つてセレウデリア騎馬部隊の第2軍を壊滅状態へと追い込み、レミニュエルの勝利を決定づけた。2人の上将軍は当然、王城にて開かれた祝勝のパーティに招待を受けた。

この2人の反応はまるで正反対であった。

貴族諸侯に対し、礼儀を尽くすのが面倒で仕方がない上、賑やかな席を好まぬエレイズは憂鬱としか感じていない一方でウォーレンは元より目立つ事が好きだし、良い女でも探してやろうとこう事でかなり乗り気なのだった。

だが、例え気持ちは正反対であつてもこの2人は友人というとお互いしかいなものだから入場は肩を並べてであつた。

大慌てで用意された正装に身を包むこの2人の上将軍は、それはそれは見応えがあつた。大将軍となつた今もエレイズ、ウォーレン、ラファインと並んで3強と呼ばれる裏で3大美将軍と尊われる彼らである。7年前も、相當に美しかつた。

男女でデザインの変わらない軍服を着ている事もあるし、体型の事もあって女性らしさにはまだ手の届かないエレイズであったが、それが寧ろ優げな独特的の艶を演出していた。また、その頃にはもう平均身長を頭一つ分飛び出して背の高かつたウォーレンには軍服がこの上なくよく似合い、「軍神のようだとさえ囁かれた。

「何だエレイズ、一晩中、壁の花になつてゐつもりか？」

場内も賑わつてきた頃、既に何人もの女性から誘いを受けていたウォーレンはエレイズの元へと一旦戻ってきた。

「性に合わないんだよ。

楽しんでくればいいんぢやない、ウォーレン？　あの青いドレスの「令嬢なんて、なかなか素敵だと思つけど」

そんなそつけない対応で気を悪くしたり、拗ねたり、ましてやエレイズ本人を連れ出そうとするウォーレンではない。

「じゃあ、そうするかな」

と、気楽にその青いドレスの令嬢に声を掛け、あつといつ間にビビリへ行つてしまつた。

side エレイズ

ヒマになつたエレイズがぼうつと周りを見ていると、驚いた事に同種がいた。このパーティにすっかり疲れて、一刻も早く帰りたく

て仕方ない様子の青年。年は恐らく同じくらいか、青年の方が少し上。黒くて長い髪を持つ、暗い印象で華やかさは無いが清潔感のある綺麗な青年だ。誘いをかけようなどという意図ではなく、エレイズは声を掛けた。

「退屈そうですね」

一瞬、吃驚したように固まつた青年だが、苦笑して頷いた。

「どうも、苦手なのですよ」

何となく、若いのに老成した喋り方だ。

「エレイズ上将軍、ですね。今日の花形がどうしたのです

「性に合わないの」

ウォーレンに言つたのと同じ台詞を繰り返すと、青年は意外そうにじっとエレイズを見た。無理もない。

これだけの美しさを持ち合わせ、そして知名度を手に入れて、パーティを楽しめない方がそもそもおかしいのだ。

「ねえ、あなた……」この前、王城にいた？

エレイズはどうも、見覚えのある姿だったのだがどうせ思い出せずさう尋ねた。

「ああ、それはきっと私の兄でしょう。ほら、あそこです。GHといつて……恐らく、来月の選定会議で大将軍位につくはずです」

エレイズはその視線を辿り、納得した。

美しい男だった。髪は恐らく、エレイズよりも長いのだろう。腰まであって、動く度にサラサラと流れる。華やかな笑顔で周囲の女性の頬をひたすらに赤く染めさせて、遠巻きにする人々の感動の溜息を誘っている。

「私は兄に連れられて来ただけです」

「一緒に行かないの？」

「いえ、私は……兄とは違いますから。ああやつて、人々の中で輝く事など出来ませんよ」

エレイズは、家族が一人としていないから、そういうもののなかどうとなく寂しく思つた。

「ねえ、あなたは？」

「え？」

「名前、教えて」

「ああ、申し遅れました。ヨナです。王立図書館に勤務しています」

そこで、エレイズの表情が輝いた。

「王立図書館？」

「はい」

「あの……もしかして、紹介状とかお願いできる? 凄く行ってみたいんだけど、文官職の知り合いがいなくて……」

「そういう事でしたら、『用意しますよ』

「ありがとう!」

エレイズの笑顔は、思わずヨナが目を細めてしまつた程、眩しくて美しかつた。

彼女は自分が興味を持っている学問分野 魔法生成の歴史について話し始め、それはヨナが人より詳しい分野だつたから、喜んでヨナの解説を聞いた。パーティ会場の一角でありながら、そこだけが学問所のようだつた。

段々と話がうつり、用兵術についての討論が終盤に差し掛かつたところで声が掛けられた。

「ヨナがそんなに夢中になつて話してゐなんて珍しいな

「! 兄さん」

エレイズは久方ぶりに、自分と対等以上の用兵術のセンスを持つ者との討論が出来たのを邪魔されて少々不愉快だつたが、顔に出さぬように注意して会釈した。

「エレイズ上将軍、初めまして。ヨナの兄の、ユーハです」

華やかな笑顔には、流石のエレイズも感服せざるを得なかつた。

「お初にお目に掛かります。

近い将来の大將軍、だとか」

「ヨナが言つたのかい？　いや、周りが言つてるだけだよ」

しばらく3人で世間話をしたり、ユエがエレイズの美しさを称賛したりしていた。これがパーティの本来あるべき姿なのだが、学者肌でありこれでも武人のエレイズには嬉しくない展開だった。どうも、このユエという人物とは相性が悪いのかもしれない……というのが、エレイズのユエへの第一印象であつた。

Side ユエ

美しい容姿、明るい笑顔と細やかな気配りに長けた話しぶり。ユエという人物は社交の為に生まれてきたようなものだつた。どのパーティ会場でも彼の行くところに人だかりができ、殆どの例外なく未婚の女性は　時には既婚の女性までも彼の目に留まろうと必死になる。

だがその日、セレウニア国境線祝勝パーティはいつもと違つた。

『あれは確か……』

エレイズ上位魔法兵、いや上将軍。

ユエははじめて、誰かの美しさに目を、そして心までを奪われた。

最初のうちは、放つておけばいつものように集まつてくる女性陣の例に漏れずエレイズも自分との関わりを求めてやってくるだろうと考えていた。その時にでも、若いパーティ参列者のお約束にでも持ち込めば良いと、つまり楽観視していた。

ところが、そうはいかなかつた。

「何だエレイズ、一晩中、壁の花になつてゐるつもりか？」

同期で友人のウォーレン上将軍がエレイズに話しかけていた。出来るだけ、エレイズから離れないように いわば、他の男が近付いたら何気なく邪魔に行きやすい位置にいたから会話はよく聞こえた。そして、聞こえてきた言葉に驚いてしまつた。

「性に合わないんだよ」

思わず、そちらを見てしまう。幸い、気付かれなかつたがたしかに疲れているだけ、というような表情だった。名工の掘つた女神像のように美しい彼女にはそんな表情も似合つが、出来るなら笑顔が見たい。

とはいえ、GHには困つた事になつた。

パーティが嫌いという事なら、恐らく人見知りする性格ということ。誰かに連れられるなどのきっかけなくして、人だかりに近付くわけがない。

さて、どうするかと思っていると、彼女が動き始めたのでグラスを返しに行くふりをしつつ目で追う と。

『ヨナ？』

エレイズと同じように、壁の花となっていた、弟である。彼は、兄のユエからすると勿体なくて仕方ないと思う程、消極的な性格。十分に整つた容姿なのにいつも暗い顔をしているし、自分は大して見栄えが良くないと思い込んでいる。

人々はユエが光、ヨナが闇のような正反対の兄弟だというが……。ユエは、ヨナにも“光”になつてほしくて、半ば強引に今回のパーティに連れてきたのだ。

その弟とエレイズがぽつぽつと話し始めたかと思うと、何といきなりエレイズは上機嫌になつてにこにことし始めた。ヨナの方も、元来無口というわけではないがそれでも珍しい程によく喋っている。

『これは少しまずいかな』

ヨナに、女性への積極性があるとは思わないが放つておけばいつの間にか2人の世界にひたつて話し込むだらう。それはユエにとつてしてみれば、全く、面白くない。

『いや、これはチャンスか』

そう思う事にして、エレイズとヨナの方へ向かう。弟に声を掛ける次いで、と見せかければ自然な接触が可能と考えたのだ。

もはや、何か、任務のようになつているがユエは驚くほどに必死なのだ。

「ミナがそんなに夢中になつて話しかねんて珍しいな」

「一、兄さん」

よほど、話に集中していたようだ、ミナは驚いたようにコエを見た。エレイズは形式的に会釈する。

「エレイズ上将軍、初めまして」

ずっと見ていたけれど。

「ミナの兄の、コエです」

一番好感を持たれるであろう笑顔を向けたコエ。エレイズは少しだけ頬を赤らめた。手応えを感じたコエ。

「お初にお目に掛かります。

近い将来の大將軍、だとか」

こんな型通りの会話を望んでいるわけではないが、型通りに返す。

「ミナが言つたのかい？　いや、周りが言つてるだけだよ」

正直などこれは自分でも確実だと思つてゐる。

その後　あくまで本氣で　エレイズの美しさを褒め称えたりと、努力をするも、とうとうコエはエレイズがミナに向けていたような笑顔を引き出す事は出来なかつた。

こつもならじで、この人とは相性が悪いのかと諦めるが、決し

てそうならなかつた。というより、ユエが自ら誰かを求めたのは初めてである。諦めるもなにも、いつでも向こうから人がやってきていたのだ。

取り敢えず、何とか連絡先と勤務先の詳細を交換し、いつか食事でもとは言つておいた。恐らくエレイズは社交辞令ととるだろうが、別に実行してはいけない道理もない。ユエの密かな戦いがその日、始まつたのである。

1（後書き）

ちょっと意外なスタートでしたか？　エレイズは結構、冷めています。
とっくに判ってるよ、という方もいらっしゃるでしょうが（笑）。

2（前書き）

美しいモノは徹底的に美しく書く主義であります。ちょっと(いや、かなり)ぐどいのは、「勘弁あれ。

side エレイズ

上将軍となつたエレイズは、レミニュエル王国南方のフォーレン地方の管理を任された。大將軍の持つ城とは違つて、あくまでも国から与えられる要塞兼住居といったものだが、そこらの屋敷とは比べものにならない建物の責任者になつた。

「エレイズ上将軍、封書が届いています」

小姓のシンが、執務室へやつてきた。

「うん、入つて大丈夫」

「失礼します」

エレイズの執務室は、綺麗に片付いている。エレイズがきちんとしているのではなくて、まだ12歳の少年小姓のシンがとてもしつかりしているのだ。彼はエレイズが執務室を空けている時間を使ってあつという間に室内整備をしてしまう。

木製の重厚なデスクが置かれており、その上には幾らかの書類と筆記具のみ乗つている。小会議用のテーブルも部屋の中央にあって、ソファが向かい合わせにある。

「誰か」「

「ユーハ大將軍です」

「……？」

エレイズは首を傾げながら受け取った。てっきり、最近王立図書館の紹介状を送つてもらい再会してからとのものの、手紙で近況報告を兼ねた学問討議を行つてゐるヨナからかと思つていたのだ。

「兄の方か」

封書を開けて、中を見たエレイズは少し考えてからシンを見た。

「明後日の予定つて何かあるつけ？」

「午前中、地方評議会の視察のみです

「夕食、誘われちゃつた

シンはちょっと驚いた顔をしていたが、彼もユーハの噂は知つてゐる。とても感じの良い美男子と聞いていて、敬愛する上将軍の相手として悪くはないと思つから

「スケジュール上は可能であります」

と答えた。イイ笑顔で。

エレイズはそれをじつと見てから苦笑すると、短い返事を書いた。

「送つておいで

「かしこまりました」

side ヨナ

今から一ヶ月ほど前の兄の相談を思い出しては、ヨナは笑いそうになってしまいます。

あの、女性関係で怖いものは無しに見えるヨナがどういう訳か沈痛な面持ちで、女性関係など一切関わりを持たない自分に相談を持ちかけてきたのだ。

それは、エレイズとどうやって仲良く話すようになったのかから始まつて、彼女の好きな物に関する情報は何か無かつたか、とか紹介状を送る次いでに色々と探ってくれとか。恋人はいそうかとか、その候補はとか……。

取り敢えず、ヨナは王立図書館に通い始めたエレイズとより親しくなる事に成功したし、学術的な文通も交わすようになつたから兄に教えてやれる情報はかなり多かつた。

「ヨナ！ 聞いてくれっ」

ユエが大喜びのていで王立図書館に駆け込んできたのは、エレイズへの食事の招待に対する返事が返ってきてすぐ。大将軍になつたエは王都に城を持つよつになつたから、王立図書館には1時間程度で行けるのだ。

「嬉しそうですね、兄さん」

大体、理由は判る。成功したのだろう。

「エレイズからOKの返事が来た」

「場所は決めたんですか？」

「ああ。【星の海】にした。お前のアドバイス通りに

「恐らく、エレイズ上将軍も気に入られると思いますよ」

ヨナがエレイズの数々の発言から推測した、彼女の好む王都の料亭をアドバイスしたのだ。外装、内装は派手過ぎてはいけないし下心が丸見えの雰囲気に充ち充ちた場所もよくない。清潔感があつて、質素ながら上品で、尚かつどちらかというと大衆向けの店が良いとヨナは勧めた。それから、エレイズがまだ10代で酒を飲まない事を忘れてはいけない。幸い、ユエは酒好きではないから飲まなくても差し支えない。本気であるところを見せるつもりなら、酒は飲まない方がいいというのもヨナの勧めである。経験は無い癖に、一般論の集大成から限りなく完全に近い計画を立てる恋の作戦参謀にユエは全面的な信頼を置く。また、このように協力を惜しまないでくれるならヨナは全くエレイズに気はないのだなど確信もできていた。

「そういえば兄さん

ヨナは、思い出して、結果は分かつていてるが聞いてみる。

「王立図書館の利用者の方……中級貴族アーベルン家のミシェル嬢が兄さんとの仲を取り持つてくれないかと頼んできたんですが」

「丁重にお断りしておいでくれ」

「ですよね。既にそうしておきました」

ユエは愉快そうに笑った。

「お前が一番の理解者だよ！」

実は、ヨナにミシェル嬢のような頼み事をしていく利用者が絶えず、彼は少し困っているのである。ここで、ユエに公的な恋人が出来ればそれが収まるかも知れないと少し期待しているのだ。しかも、相手は上将軍。身分的にも不足はないどころかピッタリである。この兄弟は平民生まれであるから、相手の家柄などは問題とされないし。

「ねえヨナ、ウォーレン君はどうなのかな？ それから、ラファイン君」

「あの二人は、あくまでも友人という位置をずっと保っているようですよ。ウォーレン殿は……言つなれば自由奔放な方で、決まりた女性は作らず好きにやつているようですしラファイン殿は逆に、家柄が家柄ですから女性関係に関しては潔癖過ぎるほど慎重です。どちらも、Hレイズ上将軍と特別な関係になる可能性は極めて低いかと」

ユエはほっとしたように笑う。

弟のヨナから見ても、兄は本当に美しい。美しいものには3日で飽きると言われるが、生まれた時から見ているはずのヨナがユエの事を美しいと思うのだ。どうやって他の誰かが飽きる事が出来よう。エレイズも、容姿に関しては取り敢えずユエに好印象を抱いたに違いない。だが、性格の方がどうなるかはヨナにも解らない。

エレイズは武官であるが、政治や権謀術数、それから用兵術、更には歴史学に非常なる興味を示す学者気質のところがある。興味の照準が、文官のそれなのだ。ヨナと話が合うという所でそれは証明されている。ユエも、頭は相当にいいからそれらの知識は漏れなく持っている。しかし、情熱を持ってそれを語れるかというと解らない。あくまでユエは武官気質であるから。実戦魔法と用兵術なら、十分に知識欲の旺盛なエレイズを楽しませる事が出来るだろうがそれ以外となると解らない。というか、恐らく今、王城に勤務しているどの文官もエレイズの話には着いていけず、曖昧に相づちを討つか、知ったフリをする羽目に陥るだろう。

『厄介な方に惚れ込んだものですね、兄さん……』

side エレイズ

ユエより夕食の誘いがあつた次の日、侍女達は大騒ぎであつた。日頃、服といえば軍服か動きやすく、女性らしさのない簡易な部屋着しか着ないエレイズの服装について語り合つ機会が生まれたのだ。

「やつぱり、エレイズ様には寒色が似合つわ

「やうかしら？ 華やかな……赤やピンクもきっとお似合いよ」

「うん、何でも似合つから迷つわね」

「丈は？」

「レティラしく足下丈がいいんじゃない」

「でも、まだ10代と折角お若いのだから。短くてもいいと思つわ

エレイズは、城内に雇い入れる使用人を最低限の人数にまで削つて
いて城内の清掃も見習い兵に手伝わせているくらいだから、侍女も
一桁しかいない。それでいて、こんなに賑やかになっている。

エレイズはその様子をシンから教えてもらつと、苦笑した。

「何でそつなるのかなア。上将軍と大将軍が食事するだけなのに。
……といふか、軍服で行こつと思つてた」

「それは駄目ですよ」

「12歳になつたばかりの、可愛らしい少年小姓は言つ。

「一般の客も入る店に行くわけでしょうし、コ工大将軍が私服でい
らつしゃつたらどうするんです。男性が軍服で、女性が私服ならま
だしもその逆は気まずいですよ」

非常に常識的かつ説得力のある話だったのでエレイズもすぐ折れた。

そして、翌日。午前中は視察の後、官僚達と会食を行つたので帰つたのは午後3時にもなろうといつ頃だつた。

「エレイズ様」

執務室に戻つたエレイズのところへ、少々興奮した様子のシンがやつてきたのはその1時間後。

「ゴン大將軍はお迎えにいらっしゃるわづです」

「……どうやつて？」

思わず問い合わせてしまつた。

待ち合わせは午後7時に【星の海】だったのだが。だから、もう少ししたら着替えて出掛ければいいと考えていたのに。ちなみに、貴族の女性は身だしなみを整えるのに軽く半日はかけるがエレイズは多忙な上将軍だし服も奇抜なものではなく1人でも着れるようなスタンダードな、裾の詰まつた青いロングドレスだし化粧もあまりしないので時間が掛からない。

「馬車のじ用意をしたそうです。……といつより、エレイズ様、どうやつて行くつもりでいらっしゃったのですか？」

「アイス・ウルフに乗つて」

「……ドレスでの移動という事をお忘れになつていらっしゃつませんか？」

「駄目かな？」

「服と髪が乱れてとんでもなく色っぽくなるかもしませんね」

「12歳の少年の発言だらうか、これが。

「……やめとく」

「兎に角、いかへく向かつていらっしゃるやうですか。まあ、あと2、3時間でしょ」

「判つた」

Hレイズは着替えるのでシンはさりと部屋を出た。

馬車でHレイズの居城まで迎えに行くところのもアナの提案だったが、考えるほどそうして良かったと思ひ。こうすれば当然、帰りも送つていく事にならうから必然的に共に過ごす時間が増える。

馬車が進むにつれて、森林地帯となつていぐ。まだ夕方の早い時間なので明るいが、夜は真っ暗になりそうな人気の無い風景である。辛うじて引かれている馬車道を通りて、段々と、森が開けると

Side GH

見えてきた。フォーレン城である。大きい城ではないが、一番古典的かつ格調高い尖塔の聳える城だ。城壁は白く、窓が多い。城門は今は開いていて、衛兵が見張りとして立っている。そこから離れたところにも何名かずつ組になって巡回しているから、壕の無い低い城壁の城だが警備に問題はないさそうだ。

衛兵達は話を聞いていたようで、馬車を見ると大して警戒する事もなく形式的に進行を止めた。

「どちら様で」

「ダークヒル城の大将軍、ユエだ」

「お通り下さい」

はっきり言って、ユエを他の誰かと間違える事はまず無い。弟のヨナであっても、顔を堂々と出して身代わりになることは出来ないだろ。それだけユエの美貌は男性とは思えない程に群を抜いた、完成されたものだったし雰囲気からしても誰も真似できない。

馬車が中庭まで進み、ユエはそこから降りた。迎えに出て来たのは、まだ10代に入ったばかりと思える黒い短髪の可愛らしい少年だ。格好から推測するに、小姓と思われる。

「お待ちしておりましたユエ大将軍様。エレイズ上将軍付きの小姓シンでござります。

主はもうじばらへりでいらっしゃいますので、控えの間にてお待ち願います」

「わかった。……そうだね、早く来てしまった」

照れたように微笑むユエに、シンもこっこりとした。

シンは、自分の忠告が完璧に的を射ていた事をユエの姿を見ると知った。彼は軍服では当然なく、黒いカジュアルな雰囲気のスーツをだらしなく見えない絶妙な具合に着崩して、中には彼だから似合う白いフリルシャツを着てている。

豪華ではないが上品に整つた控えの間にユエを通したシンは紅茶を淹れながら、こつそり観察していた。変わった趣味があるわけではないシンも溜息をつきそうになる美しさである。長い髪は優に腰まであるのだろう。射干玉のように艶やかな輝きで、燭台の炎をゆらゆらと映していて神秘的に見えた。瞳は黒真珠。目の形は綺麗なアーモンド型で、女性のように大きい。姫君と勘違いしてプロポーズするどいかの王族がいても笑われないだろう。

そんな彼はまた、白磁の頬をほんのりと紅く染めている。

どう考へても、エレイズと会つ事を心待ちにしているようでシンは少し、他人事ながら得意な気持ちになつた。自分が10になつた時から仕えて、様々な偶然が重なり専属小姓を務める事になつた女将軍は、神のように美しい大将軍の心をとうとう射止めたわけだ。

『エレイズ様も、女神のように美しいのだから。お一人で並ぶと、とても調和がとれる気がするな』

その光景を楽しみにしながら紅茶を淹れ終えたシンは壁際で待機す

る。

「シン君？」

「は、はい」

声を掛けられるとは思つていなかつたので、身体をびくつかせてしまつた。

神の彫像は何を言つたかと思つたら、につ、「うう」と笑つた。

「美味しいよ。紅茶淹れるの、上手なんだね」

「……恐縮です」

シンは真っ赤になつて頭を下げた。

同時に決定した。

『例えどんなにエレイズ様が消極的でも、ユエ大将軍とエレイズ様が結ばれるように最大限協力しよう』

「お待たせしました、ユエ大将軍」

丁寧に礼儀を尽くし、エレイズは低頭してから控えの間に入つた。すぐに立ち上がったユエは、うつとりとその姿を見た。

「いや、僕が早く来てしまったから。

……本当に、美しい」

エレイズは少し笑つた。

「大将軍に言われても、「冗談にしか聞こえません」

シンは「そんな事ありませんよ！」と勢いよく叫びそうになるのを必死で堪えた。

シンの予想を遙かに超える美しさだった。

光沢のある、明るい青の生地のドレス。胸から上の肩、腕、背中を露出させたベアトップで、スカート部分には波のように緩やかなひだが幾つも重なっている。髪は高い位置で一纏めにされ、顔周りに少し残されている。緩やかなウェーブが彫像のように整った顔に愛らしさを加えてより一層魅力的にしていた。

ひとりしたシンに見送られて、神々しい2人は出掛けていった。

3（前書き）

読んでくださっている方には、ほんと申し訳ないですけど……血口満足の塊になりました。何が面白いか自分でも判らない……。

「城主の仕事はどう? もう、慣れた?」

まずは、仕事の話から。

「なかなか難しいです。特に俸給が」

小さく笑うと、花のよつと美しく、会わせて笑うのを忘れてしました。

「まあ、Hレイズ上将軍はきっとまた近い内に大將軍になるだろうから」

「それにはどこかの席が空ないと」

「おっと、これは不謹慎だった」

どうやら、警戒心は解いてくれたようでの後は滞りなく……一般的なものであるが……会話が続いたのでユーハはまつとしていた。普段なら決してこんな心配はしないのだが。

「王立図書館に入り浸つてるとか」

「入り浸つてる……ヨナが言つたんですか? ちゃんと仕事をしてます」

拗ねたように言つのが可愛くてたまらない。

「判つてゐる、判つてゐる」

笑いながら弁解した。

「学問に興味があるのに、何故、武官に？」

「私、自分の出生が判らないんですよ」

驚くほどあつさりと言つものだから、大した問題と本人は考えていないようだがユエにしてみれば、あつさり言つ事ではない。

「判らない……」

「親が誰か、生まれた国がどこなのか……。

気付いたら、レミュエル王国の辺境、森で営んでる小さな料亭の夫婦に育てられてたんですよ。その2人が何とか、国籍を取得していくたんですけど、文官になるには色々なものが足りなかつたんです。だから、力さえあれば……今のように、出世できるし地位を追われる事もない武官を選んだわけです」

質問してばかりだが、ユエの口からは質問しか出なかつた。

「なぜ、武官に？ 育ての親の料亭を継ぐつとは考えなかつたの？」

「実は、ウォーレンとは幼なじみみたいなものでして。

彼は正真正銘のレミュエル生れ、レミュエル育ちなんですけどやつぱり辺境地帯に住んでたんですね。簡単に言つと、あいつに誘われ

たわけです。平民の田舎者が受けて受かるよつた試験じゃあ、ビツ
せないだろ？から……て言われてね

「ところが受かった？」

「他の受験者の酷い」と。ユエ大将軍も思いませんでしたか？」

「うん、僕も確かに失望した」

思い出す。これで合格なのかと驚くよつた、低レベルな魔法を得意
げに披露する貴族の子息達。

「まあ、それでもって若氣の至りです。殆ど同期のラファインと知
り合った事もあるんですけど、我々でレミュールの軍を変えよう、
なんて」

ゴエは笑うトレイズを、真剣な眼差しで見た。

「本当に、出来ると思つ？」

「……え？」

「レミュールの軍を、変える事」

ゴエの密かな切望であつた。しかし、諦めていた。

貴族のたまり場と化している、腐つた、弱体化した軍部。国境警備
軍が平民ばかりなのだが、こちらが優秀なお陰で国境戦は今まで勝
ちを收めていると言えるくらいだ。もし、大規模な侵攻を受けたら、
レミュールは本当に、危ない。

「ラファインはまだその情熱に燃えています。ウォーレンもきっと

「君は」

「私は……」

苦笑した。

「取り敢えず、今ままでは駄目ですね。少なくともラファインが大将軍にならなくては。

バーフォンハイム家出身の彼が動けば、嫌でも多くの貴族が動き、変わり始めます。

だから、私やウォーレンばかりが大将軍になつても意味がない。いえ、なれないでしょう、今の段階では。実力の事もあるし、政治的な問題もある」

コエは熱心に言った。

「僕は、レミュエルの軍を、何とかしたいと思つてゐるんだ。ずっと、思つてた……。君達が同じ事を思つていて、本当に嬉しいよ」

「じゃあ

エレイズは、にっこり笑つてから照れくさそうに言った。

「期待していくもいいですか？　コエ大将軍がこれから、軍を変えしていくって

「君が応援してくれるなら、何でも出来る気がする」

「……あの」

エレイズは、自分が何を言いたいのか一瞬判断つかなくなつたようになり固まつたが、口がその後は勝手に動いたようだ。

「エレイズと、呼んでください」

目を丸くしたユエだが、本当に嬉しそうに頷いた。

「ああ、エレイズ」

「……変なこと言いました」

「仲良くなれたみたいで嬉しいよ」

「……」

そろそろ日が落ちていたから、エレイズの頬が耳まで真っ赤に染まつたところにはユエは気付かなかつた。

「では、テレパスで呼びますからよろしく」

「お待ちしています」

ユエが御者にそう頼むと、大将軍と上将軍は王都の外にある小洒

落た飲食店【星の海】に入った。混んでいるわけではないが、そこに人は入っている。

「すみません」

「あ、ご案内致します」

予約をしていたユエです……と、彼は言おうとしたのだが流石、王都の女性。一瞬でユエを確認すると営業スマイルを日頃の7割り増しにして2人を案内した。

「有名ですね」

「大将軍になつたから、かなあ」

ところが、そういう訳でもない。王都の女性に石を投げれば、彼が王都に初めて現れた日から彼を記憶している者に、まず当たる。

「ちょっと、あの店員さんの目が怖かつたなア」

エレイズは小さく笑つた。メイド達が気合いを入れた所為で、すっかりデートのような格好になつてしまつているのだ。女心に嫉妬しない方が間違つていいかも知れない。更には、エレイズは現在、王都で顔は殆ど知られていない。

『どこの誰だか知らないけど、ちょっとユエ大将軍に誘われたくらいで調子乗らないでよね！』

という視線が、恋人とテーブルに付いている女性からも飛んでくるから今日、ここでデートを計画した男性陣は可哀想だ。……考え方によつては、彼女の視線を追うことでの気後れもなくエレイズを眺められるという特権も彼らに与えられたわけだが。

兎に角、この2人はよく目立つた。彼らのテーブルに料理が運ばれて来る度に振り返るのが、客達の習慣になつてしまつたかのようだ。

「綺麗な店ですね」

客達の事は一切無視する方向でエレイズ。

「名前の通り……天井が星空みたい」

「喜んでもらえて良かつた」

エレイズの声はかなり明るく、やはりどんなに達觀した雰囲気でも女の子の部分はあるようだ。それを恥じるようにエレイズは苦笑いし、話を移す。

「料理も美味しいですね。知つてらしたんですか、ここ?」

「来るのは初めてだよ。ちょっと、頭の良い男にエレイズ上将軍をデートに誘うならどこがいいか、一緒に考えてもらつたんだ」

「デート……」

顔を赤らめるとこりが、可愛くて仕方がないと思つて。

「酒を飲まないといつから、いつこうといふ方がいいと思つて。
紅茶が好きなの？」

「わつですか……何で？」

何で判るのだと首を傾げると、コトは微笑んだ。

「可愛い小姓のシン君は、とても紅茶を淹れるのが上手かつたから。
鍛えられてるのかなと」

「そんな無茶な要求は、別にしてないです。シンのご両親が、紅茶、
大好きだったそうで淹れ方を小さい頃から教え込まれてたみたいで
す。あの子が淹れてくれる紅茶を飲んでも、外で飲みたくないな
ります」

「だからゴーヒー？」

「ええ。

割と、食べ物の好き嫌いはしないんですけど。紅茶だけは無駄に舌が
肥えてしまつたようで」

「シン君はいつから？」

「2年前に拾つたんです」

「……は？」

もう既に何度か、エレイズの単純明解過ぎる言葉に首を傾げると、うのをやっているコト。またやってしまった。

「あまり、誰かの話を勝手にするのは好きじゃないので簡単に言つと……」

エレイズが語つたのは、簡単とはいえ中々に驚くべき物語だった。

2年前、エレイズは将校になつたばかりであった。訓練も兼ねた国境への遠征の帰りに、彼らは夜盗に襲われている村を見付けた。兵が疲弊している訳でもなかつたし、見逃したとあっては厳罰ものであるからエレイズとその500名の部下は夜盗を取り締まつた。比較的、早い段階で対処したために被害は大きなものにはなつていなかつたが死者も当然、いた。その数少ない死者の内、2人が村の中でも特に裕福だつたシンの両親。シンも怪我を負つていて、それがかなり深かつたからエレイズ達は応急処置を行い、王都へと連れて行つた。そこでシンは一命を取り留め、5体満足で元気を取り戻す。

だが、問題は彼が家族と家を失つた事。命あつての物種ではあるが……。村は全体に貧しく、シンの家はかなり特別だつた。養子を受け入れて育てられる環境が整つた家は生憎なく、居場所が無くなつた彼をエレイズはあっさりと見習い兵として雇い入れると言い放つたのだった。最初のうちは、兵士となるべく魔法にも剣術にも手

を出していた彼だがそれよりも、何よりも給仕係としての手際の良さ……そして、彼の淹れる紅茶の美味さにエレイズは注目し、彼を一般兵見習いとしてではなく小姓として雇い始めた。給仕の手際に加えて、書類整理が得意で物覚えがよく、子供ながらに弁が立つ彼をエレイズはあつという間に気に入り、いつのまにか専属小姓にしていた、という事だ。

「まあ、弟が出来たみたいで嬉しかったのもあります」

エレイズはそう締めくくった。

「家族、いないので……憧れたんです」

「そうか」

「エは笑つた。

「お互い、良い弟がいるわけだね」

「ヨナですか？……生意気に思つたりしないんですか」

単純な好奇心のようだ。

「まあ、ちょっと頭が良すぎるかな。僕の頭は凡庸なものだから時々羨ましい」

「……でもユ工大將軍は、誰にも負けないものをたくさん持つて
じゃないですか」

それを聞くとユ工は少し、意地悪そうに笑った。

「是非、教えて欲しいな」

しまつたと、エレイズは思つたが、もう遅い。

「その……綺麗なお顔だし、それが無くとも人を引きつける魅力と
いうか……。あと、大將軍の笑顔を見ると何だか……安心します。

勝手な事を、失礼しました」

『……殺し文句だ。彼女、自覚してゐるのかなあ』

ユ工は平静を取り繕つて、自制心を保つのに四苦八苦した挙げ句、
ようやく落ち着いた。

「そろそろ行こうか」

「そうですね」

「今回は僕が呼び出したんだし、僕が払うね」

「そんな、悪いですよ」

「今日は、ね

「……」

非常に自然な流れで、次回の約束を取りつけられてしまった。

*

「いんこけは

王立図書館が混み合つのは、週末の午後くらいであり後はぼつぼつと返却にやつてくる者や時間つぶしにやつてくる者が殆どなので職員はなかなかヒマを持て余す。

「返却、お願ひします」

ヨナのといひにせきてきたのは、見慣れぬ10代を少し越えているかといふ少年だ。すつきり短い黒髪で小柄、顔立ちはひけらかというとまだ可愛らしい。

「ええ、どうぞ

ヨナが軽く微笑んで言つと、とことこ、といつ風にやつて来て本を出した。それを見てヨナは、思わず少年を見た。それらは、先週エレイズが借りた本であつた。

「失礼ですが、あなたは？」

「僕はシンと申します。エレイズ上将軍の専属小姓として働いています。現在、上将軍が多忙ですので代理で返却にきました」

「成る程、そうでしたか」

ヨナが返却処理を終えるのを待つて、それから他の利用者がいない事を確認してからシンは言ひ。

「ヨナさんは、ユエ大将軍の弟さんなのですね？」

「ええ、そうですよ」

「率直に申し上げますね。

僕はどうしても、エレイズ上将軍とユエ大将軍の仲を成立させたいのです」

ヨナは流石に驚いたが、同意見であつたので頷いた。

「ですが、エレイズ上将軍は控えめですしユエ大将軍も慎重になりすぎていらっしゃるよう」思えるんです」

「そうですね。兄は……今のところ、エレイズ上将軍に嫌われぬ事を第一に動いていますから」

「だから、ヨナさん。

僕がエレイズ上将軍の情報をヨナさんに伝えますから、ヨナさんは僕にユエ大将軍の情報を教えてください。多分、あの状態だとお互に踏み込んだ質問はしないと思われますから……。

相手の事が判つた方が、自信がつくし対策も出来ますでしょ？」

ヨナは思わず笑ってしまった。勿論、好意的な意味で。

「面白いですね、それは。
判りました。大抵、平田の午前中は今日のように時間を持て余して
いますからお話しも出来るでしょう」

「じゃあ、エレイズ上将軍の代わりに僕が本を返して来る事にしま
す」

シンはじつじつした。

「それと」

メモを出した。

「この本をお願いします」

「判りました」

「」「弟同盟」が結成された。

4（前書き）

話の進行係が可愛い小姓のシンになつてきました（笑）。

「凄いですねえ。ヨナさん、僕なんかいなくつてもエレイズ上将軍の事、よく判りますねえ」

「判つてこねとこつよつ、つまらない推測ですよ。ヒマなので」

「またまた」

シンとヨナはすっかり仲良くなつていた。

「エレイズ上将軍には、今度会つ時は黒のドレスが良いと言つておきますから。勿論、僕の見立てとして。ユエ大將軍には秘密にしておきましょううね」

くすくす笑うシン。ユエがヨナに、

「彼女には黒が似合つと思つんだ」

と言つていたといふ話を聞いたのだ。

「それから、今度は髪を下ろすよつて言つてみてください。あの馬鹿兄……失礼、は、ひたすらエレイズ上将軍の髪の手触りを気にしていましたから」

「あははー、言つておきます。髪つてところが控えめですねえ。
ふふ、馬鹿兄……」

「我が兄ながら、普段は非常に聰明な人物なのですがエレイズ上将軍の事となると」

ヨナは肩をすくめたが、その笑みをたたえた瞳は優しかった。

*

- - - side エレイズ

「ねえ、シン、一週間後の予定は？」

「少々お待ち下さい……何もありません。何か、ご予定でも？」

エレイズはちょっと照れたようにさつきシンが渡した封筒をひらひらさせた。また、招待状が来たというわけだ。これは、シンもヨナを通じて知っていた。だからスケジュール調整をして一週間後を空きにしたのだった。

「行つてらつしゃいませ

「うん。また、あんな感じでいいのかな」

「服装ですか？」

「うん……」

シンは日本通りに喋る。

「僕の素人考えですが、エレイズ様の銀色の髪には黒い服が似合つと思います。それから、髪はお背中に垂らした方が服とのコントラ

ストが明確になつて宜しいかと

エレイズはちょっと吃驚したよつにシンを見た。

「どいで、そんなの覚えたの？」

「秘密です」

ヨナの入れ知恵である。彼は、理論的に女性の事をよく判つてゐるから恋人だつて出来るとシンは思うのだが……本人にその気が無ければ、可能だとも思つていないうつだ。

「上官に隠し事？まあ、いいや……。じゃあ従おつかなあ。でも、そんなに何着もドレス持つてない……」

「い」心配なく。あの日から侍女達が増産していましたので

エレイズは紅茶を吹き飛ばになつた。

「何を期待してゐる、あの人達は」

「ふふ、判つていらつしやるんじょつ？僕も期待してます」

耳まで真つ赤になつたエレイズを見て、これはいけると確信したシンだった。

「もう少し、自信を持つたらどうです？ 兄さん」

「でも嫌われるのが怖いじゃないか……」

「大丈夫です。兄さんを嫌う者なんて、相当性根が曲がった人間ですから。そんな人とは付き合わない方が寧ろいいくらいですが、エレイズ上将軍は部下からの信頼も厚い方。気むずかしそうに見えたとて、性根は真っ直ぐな方のはずですよ」

ヨナはここにのとこら、ユエを元気づけるのが相當に上手くなつてきた。……というのも、今までそうならなかつたのはユエの気持ちが落ち込むことなど、エレイズに出来つまでは1年に数度となかつたからである。

「本当にそうかな」

「強気になつてください。そんな調子では、気の弱い男と見られてしましますよ。

エレイズ上将軍は、軍人なのです。上品な方ですが、それと気が弱いのとは話が別です。自分より弱い男には興味を持たないでしきう

ユエはヨナをじっと見て、真剣に頷いた。

「判つた。弱みは見せない」

「ええ、その意氣です」

まるで、決闘に送り出すようだなとヨナはちょっとと思つた。

*

第一回は成功を収めたので、今日も同じ店に入った。密は当然、同じ者はいないわけだが店員はしつかり覚えていて

『まさか、正式にお付き合へ?』

などと、勘ぐっていた。お客様に冷たい視線を浴びせるわけにはいかない女性店員達は、示し合わせて男性店員に給仕を行わせた。

「それにしても」

ユエは、驚いていた。

「実は、エレイズには黒が似合つと思つてたんだ。そうしたら黒を着ているし、想像以上によく似合つてるから驚いたよ」

「……シンがどこかで覚えてきたらしくて」

エレイズは、今日は首もとの詰まつたローブにも近い形のドレスを着ている。袖が無い代わり、レース地の上品な長い肘まである手袋で腕を飾っている。髪は侍女達が大喜びで梳り、サラサラとしてユエにも負けぬ輝きを放っていた。

「はは、シン君は何でも良く判つてる。ほんと二歳かな

「時々、信じられないですよ。毎日会つても」

小さく笑い合つた。

「本当に、今の軍は危険だよ」

溜息と共にユエはやわらかく。

「内乱だとか、そういう事じゃない」

「判ります。本来、国を守護するべき軍部が……ユエ大將軍のような一部の例外を除き、戦力ではなく権力のたまり場になつてゐる……。これでは、腐食剤を抱えているのと同じです」

エレイズの言葉にユエはしかと頷く。軍の話はともかく、政治の話をさせるとエレイズの方がユエより何枚か上手だ。だが、幸いにもユエは自分より知恵のある者の言葉を聞いて感心できる寛容さを持つていた。

エレイズは続ける。

「国内が強固であるのに、外部からの攻撃を受け、それだけで滅びる国というのはまずありません。ですが、その逆なら往々にある。内部の腐敗が、外部からの脅威を助長する結果になつてしまふんです」

「そして、国家といつものば必ず、上から下へと腐敗が進む。腐敗を止めたければ、上をどうにかするしかない」

「ユエ大將軍の仰る通りです」

今日一番、彼らが力を込めた話が軍の腐敗についてだと知つたら、ヨナはともかくシンはさぞかしガツカリするだろう。だが、ユエとエレイズはどうやら趣味やら人間関係、または艶めいた話をするよりも軍事・政治論を語り合う方がよほど相手と心的距離を詰める事が出来る人間性だったのだ。

エレイズは今日、今まで、武力と人気があるだけだと思っていたユエに思つた以上の思考の柔軟性と意思の固さがある事を知り、ユエもエレイズが唯、生意氣な政治論を振りかざすだけの武官ではない事を知つた。互いの美しさを認め合つ事よりも、魂の高潔さを知るほうが余程、彼らにとつては収穫であり、関係性の前進であつた。

*

- - - side ヨナ with シン

「あれから半年ですか」

シンは、図書館の近くに小さな部屋を借りて住んでいるヨナの元を訪ねていた。半年経ち、正真正銘の弟と弟みたいな小姓はとても仲良くなつていていたのだった。

「計4回……まあ、兄さんの遠征があつたり国境付近で不穏な動きがあつたのだから仕方ありませんが。ちょっと少ない気がしますね」

「ですよねえ。というか、ここいらでエレイズ上将軍から動いて欲しいです。女性から誘うのははしたないとかいう、原始的思考を持つていらつしゃる訳がないと思うんですけど」

「確かに、彼女の考え方はラジカルといえますね。

まあ恐らく、照れていらっしゃるのでしょうか？」

ヨナの部屋なのだが、紅茶を淹れるのはシンだ。年齢関係だとかではなく、単にシンの紅茶を淹れる腕前が最高級だからである。比べてしまふから外で紅茶を飲めないのが悩みだとエレイズが以前、冗談めかしていたのだが……ヨナは今や全面的に肯定する。外で紅茶を飲まなくなつた。飲んでも、美味しい気がしないのだ。

「僕、動いてみます」

「ほり?」

シンは、決意を固めた瞳を見せた。

「エレイズ上将軍に、自分からお食事に誘つよつ」と。そして、場所は育ての「両親の料亭にするよう」と。それから、有給とつて帰らうかなとぼやいていらっしゃつたので

「成る程、それではよろしくお願ひします。いつ頃になるでしょう？」

「うーん、恐らく、今月中ですね」

「判りました。今月中は、必要以外の予定を入れないよつて言つておきます」

「お願いします」

とはいっても、ユエはここのところの仕事以外の予定というものを一切持っていない。女性に誘われた場合は勿論、男性同士の付き合いも大抵断っているようだ。……いつでも、予定が許せばエレイズと会えるように。涙ぐましい努力である、トヨナはいつも感心を通り越して感動しているのだった。

- - - side シン

シンはエレイズの執務室にていつも通り紅茶を淹れていた。ものの次いで、という風に口火を切る。

「そういえば、『実家に帰る』と、仰ってましたよね？」

「うん。』の前、時間があれば帰つて来いって手紙が来たからね。時間ならありそまだから」

そう言つて、エレイズは何となく楽しげであつた。血の繋がつた家族でなくとも、料亭の夫婦は他の何にも代え難い彼女の両親なのだ。

「シンも行く？」

「お誘いありがとうございます。でも、僕よりもユエ大将軍を誘つてはどうです」

エレイズは困ったように頭へ手をやつた。

「でもなあ」

「“友人”を家族に紹介したとて、不自然ではありませんよ」

シンの暗に言いたい事を理解して、今度は溜息をつくエレイズだった。

「好きだねえ」

「……あの」

シンは紅茶を淹れ終えて、エレイズのティスクに置くと改まった。

「何？」

「エレイズ様は実際、ユエ大将軍の事をどう思つていらっしゃるんですか？」

エレイズは紅茶を飲みかけて、固まつた。

それはもう、氷結呪文を使われたかのように固まつた。

「……エレイズ様？」

「考えた事、無かつた」

「……え……ええつ！？」

じょ、「冗談ですよね？ エレイズ様つ。あはは、お人が悪いなあ

「いや、ほんとに」

エレイズは深刻そうな表情で言った。

「どうなんだと思つ?」

「それを聞きますか!…?」

シンは動搖の余り、敬愛する上司に思いつきつ突つ込んだ。幸い、エレイズはそういう事を気にしない。

「そもそも、恋つて何?」

「そ……それは。

一般的には男女が互いに好意を持つ事を語つのかと」

「私、シンの事大好き」

「恐縮です」

「シンは?」

「それはもう、此の世で一番の方と思つてこます」

「これ、恋?」

「違います」

エレイズは本物に、「訳わからん」といつ風に首を傾げる。

仕方ないので、シンは半ばヤケになつて自説を披露する。

「宜しいですか、」この場合を恋と呼ばないのは何故かといいますと、エレイズ様は僕が男だから好きなのではなく、僕はエレイズ様が女だから敬愛しているのではないからです」

「うう……ん」

「僕は例えば、Hレイズ様が天を突くような大男であつても同じよう尊敬申し上げるでしょうし。エレイズ様も、例え僕が少女であつても問題を感じないはずです」

「そう言わればそうなのかなあ」

些か極論である事は否めないが、概ね正しいだらう。

「恋はこれと違つと、僕は思うのです。
ユエ大将軍にとつては、Hレイズ様は女性でなくてはならないのです」

「……へ？」

シンは、そもそも核心を突かない気は無かつた。

「ユエ将軍は、軍人としては勿論の事でしょうが、女性としてもHレイズ様の魅力の虜になつておられる。僕はこれを、ユエ大将軍はエレイズ様に恋してらつしゃる……と表現します」

エレイズは、じばりく絶句していた。

5 (前書き)

書けば書かるものです。まあ、更新ペースはだらだらとやるのでしょうか……『長いおじさん』へだれこませ

- - - side ハレイズ

本当に楽しそうだと……ハレイズは半ば感心していた。

エレイズは言つた通りに有給休暇を取つて、“実家”に帰る事にしてその途中である。馬車が通れないような細道を幾つも通らなくてはならないので馬に乗つての移動だ。

煉瓦も敷かれていない茶色い土が剥き出しになつた道は、日に鮮やかな緑色で包まれた田畠で色取られている。天候にも恵まれ、非常にどかな風景だ。

真っ黒な美しい毛並みの馬をぼくぼくと歩かせているエレイズの横で、同じ速度で茶色の馬を歩かせているのは大將軍ユエイだ。シンの勧めに従つて、誘つてみると一も一もなく「行く」という即答が帰ってきたので仕事は大丈夫か聞いてしまつたほどだ。

そのユエイは終始、ずっと良い笑顔である。

『シンが言つてた事、ほんとみたいだなア』

さて自分はどうじゅうかと、そればかり考えていた。

「いつもいつもやって馬で？」

ユエイが声を掛けってきたので、正直に話す。何も、上品ぶる必要はない

い。

「いえ、いつもはアイス・ウルフで」

「ああ……相當早いよなあ」

「ええ。体力も私の魔力とイコールなので、道中全力疾走でできますから」

ユウは明るく笑った。

「ほんとに瓶はたのもしいんだから」

「……馬鹿にしてます?」

「あやか! ……とするとい、迷惑だったかな」

「いいですよ。急いで帰らなきやいけないわけでもないので」

4、5時間の違いである。どうしても半日は必要になるのだから、時間についてはあまり気にしていなかった。エレイズの城が田舎の真っ直中にあるため半日で済むが、王都から帰るとなれば、もう殆ど旅のよつなるものとなる。

「うううううう、こんな遠出に誘つて申し訳ないです」

謝るのはうりうりとこづけだ。

「君の誘いなううううううでも行へよ」

「……そう、ですか」

この短い旅で何度もかの殺し文句がきた。誰がけしかけたのか、随分と発言が積極的になつたといつて遠慮が無くなつてゐる気がする。周りに入つ子一人いない、のどかな田園地方だからだろうか。

また、その笑顔は凶器の一種であると思つ。

- - - side ヨナ

ヨナは王立図書館での仕事が一段落ついた頃、だつた。小1時間の休憩時間中、兄は今頃どうしているかなと考えてみる。

『まあ、あの調子なら、終始、最高の笑顔なのだろうな』

エレイズからの手紙が来たときの、彼のテンションはもう凄かつた。ヨナはその見た目の通り、アルコールに弱いから滅多に口にしないのだが宴会もかくやというハイテンションの兄に結局付き合つて、酔いつぶれた。酔いつぶれたといつても、眠りに落ちただけであるが、断じて人に迷惑はかけていない。

『実家によばれるという事はある程度以上の好意を持たれているのでしょうか。積極的に出てみてもいいのではないか?』

と言つてみたが、どうなつてゐることやら。

ヨナとしては、さつさと正式に付き合つてもらい、彼の仕事中も何

も関わらずやつてくる町娘達の

「ゴエ大将軍とエレイズ上将軍の仲ってどうなってるんですか！？」

といふ質問から解放されたい。1人に

「ああ、正式にお付き合こしていますよ」

とさえ言つてしまえば噂が簡単に広がつて質問者がいなくなるはずなのだ。市井とはそういうものだ。

- - - side エレイズ&ゴエ

「エリです

エレイズがそう言つて馬を止めた。ここは既に、かなり深く森の中へと分け入った場所。木々の所為で少し薄暗かつたがそこは広場のようになつていて暮れかけている空がよく見えた。広場の奥にぽつんとある木製の家。対象物が無いので判りにくいが、王都の狭い土地にある料亭よりはよほど大きい。中から温かい光が漏れ、また良い匂いもする。

「華やかでもない郷土料理ですけど……味は保証します

そつ言つたエレイズは、馬を降りると手綱を手頃な木に結びつけた。馬小屋はないのだ。

「楽しみだな」

「いらっしゃったユエも、それに倣つた。

2人が並んで店に入ると、既に何名かの客が入っていた。そこでときぱきと料理を運んだり、客達とテンポの良い会話をしている初老の女性にエレイズは声を掛けた。

「母さん！」

「まあエレイズ……エレイズ！？ あらあら、お帰りなさい！ その方はだあれ？ 何て素敵なの！」

物凄い勢いで駆け寄ってきたエレイズの母、エミリアにユエは微笑んで挨拶した。

「レミニュエル王国大将軍のユエと申します。エレイズとは大体1年前からお付き合ひをさせてもらっています」

「まー お付き合ひー！」

「いや、友人付き合いだから」

エミリアは聞いているか否か。ふつぶらとした頬を赤く染めて、大きな声で店の奥に叫ぶ。

「あなた、あなた！ ちょっといらっしゃいなー！」

「何だ？　おお、Hレイズか。お帰り」

「ただいま」

父、ダニエルは人の好さそうな笑顔を浮かべてやつてきた。この店では彼が調理担当である。眼鏡をかけた感じの良いダニエルと、ふつぶらとして優しそうなエレニアが並ぶだけでこの店の雰囲気が判るというものだ。

「いいから座りなさい。疲れてるだろ？　いやあ遙々よく帰つてきたね。

そちらは？」

「ユエ大將軍」

「へえ……へー？」

ダニエルはぽかーんとユエを見た。相変わらず、凄まじくイイ笑顔のユエは礼儀正しく一礼してから

「ユエと申します」

と名乗つた。

「H、Hレイズ、後でその話はしような。まあ、まず食べなさい。
ね、うんそうだ、そうだ……」

「あらあら、てんぱつちやつてー…

Hレイズアはダニエルの狼狽を見て笑いながら

「ま、こんなに素敵な人が来たらねえ。追い返せもしないわね」

とゴンにワインクして2人を席に座らせた。

「食べたいものはある?」

「いつも通り任せる」

「はいはい。ゴンさんも少し待ってらしてね」

「お世話になります」

完全に勘違いしている両親であった。

「すみません。後でよく言つておきますから」

勘違いしたまま、いつも以上に気合いを入れて食事の支度をしている両親を見てエレイズは苦笑した。それに対しても艶やかな笑みを浮かべるゴン。

「勘違いしてくれたままでも俺にとつてはいいけどね

「……どうかしたんですか

「うふ。遠慮はやめたんだ」

そこへ料理が運ばれてきたので、話はそれへと移つていったが。エ

レイズはしづらしく困惑したままだつた。

華やかさはないが、味は保証できるところHレイズの言葉は間違つていなかつた。夫婦が毎朝摘んでくる新鮮な香草や、自分達の烟で育てている色とりどりの野菜。育ちも都の方であるコエにとつて、見たこともない野菜が多かつたが流石ここで育つただけあるHレイズがきちんと解説してくれた。

この料亭がある森を王都側と反対に抜けたところにある広い牧場で育つた名物牛の肉の甘辛い味付けはとても食べやすい。

「魚は父さんが釣つてきたものなんですよ」

「IJの近くに川が？」

「湖です。リーナ湖といつて……知名度は低いですが、綺麗なところですよ。今日なんか、天氣もいいし風もないし……月がよく映えてるんじゃないかな」

その後は、殆ど無意識に口にした。

「見に行きますか？」

驚いた顔をしたユエを見て、自分の言つた内容を思い出した。雪のような色をした頬を紅くしてしまつた。

「じゃあ、連れてつてもうおつかな」

あまりにも嬉しそうなので、[冗談とは今更言えまい。

『まあ……いいか』

久し振りに、気に入りの場所に行きたかったのも確かだ。

5（後書き）

田舎のおばやんとおじさん書くの大好きwww

6（前書き）

眞面目に恋愛事情一本は書けませんよ、はい。ギャグ的場面（「夫婦」をねじこんで、陰謀編をねじこんで、戦争までやらないとやつていけない（笑）。気合いが保たない。

- - - side エレイズ

料亭から数分歩いたところにある、広い湖。ふんわりとした優しい風が控えめな波を作っている。頭上には丁度月が昇っており、円形に近い湖の中心に青白い月光を落とす。湖を囲むように立ち並ぶ木々の葉や枝がほんの僅か、風に動く音。そんなに遠くへ来たわけでもないのに、まるで世界から切り離された空間のようさえ感じ
る静けさ。

ここが、リーナ湖。子供時代、一人でこつそり夜半に家を抜け出して月を眺めるのが好きだったエレイズは今、思いがけぬほどこの風景が似合う友人とここにいる。……友人、だろうか。

青白い光を受けて輝く、射干玉^{ぬばたま}のような髪に触れてみたいと思つた。半ば無意識に手を伸ばすとその手が捕まつた。

「すみません……ええと」

怒られるかと思いきや、湖に女神が住んでいたのなら彼女が嫉妬して溺れさせてしまつような美しい人は優しく笑つた。そして、片方の手でエレイズの頭を撫でた。

「俺が先だよ」

そんなに丁寧にしなくとも良いと思えるほど優しく、銀色の髪が美しい指に梳かれる。

「綺麗な髪……月の色だね」

「ユウ大将軍の髪は、夜空みたい」

月の光を受けて時々、きらきらと輝く様は夜空に星が瞬ぐのに似ていた。横に並んでいたがエレイズはユウの前に立つて自分もその夜空の髪に触れた。

「それなら」

ユウは髪からそっと手を離すと、優しい動作で目の前の人を抱きしめた。

「月と夜は共にあるべきじゃないかな」

「…………」

「ずっと。嫌？」

エレイズの中にぐるぐる回っていた疑問は、もう無くなっていた。

考え直せば、ずっとそうだったのに。自分には有り得ないと思つていたのかもしない。それに、こんな人が自分に特別な想いを持つてくれているという自信が持てなかつたから。心に向き合つて失望するより、心を騙す事を選んでいたのかもしない。

「嬉しい」

正直に言えた。

「……両親の勘違いを本当にしたかやおつか？」

ゴンは悪戯っぽく笑つた。もう、迷いの無いトレイズは相手の腕を抱きしめた。

「後悔しない？」

「絶対にしない」

微笑み合つと、まるで何年もそつしてきたかのように自然に手を握り合つて料亭へと戻つていった。

「まあ……って、何で過去形なのよ…」

しかし、ダニエルはエレニアの発言をうちのけである。それから無駄にクッシュョンの置き場所を動かし続いている。

「あなた、クッシュョンはもういいからー、お酒……はよくないわね。大事な話だもの。お茶を淹れてきてちょうどだい！ 少しほは氣が紛れるでしょ？」

「うん……そうだな」

完全に「お父さん寂しい」の状態になつているダニエルを、腰に手を当ててぱつぱと追い出しながらエレニアは室内を歩き回つて厳しいチックを行つ。

「もう始めたの？」

帰つてきたエレイズとユウを迎えたエレニアに、娘はひよつと驚いたよつて言つた。

「折角あなたが帰つてきてたし、ユウさんをきちんとお出迎えしないといけないからね。それと、大事な話もあるんでしょ？」

エレニアがワインクを飛ばしたので、2人は苦笑した。

*

「ヨナさん！ どうどうですね、聞きましたかー？」

「ええシン君、長かつたですね」

シンとヨナはがつちりと握手をかわした。Hレイズとユエが宿泊日数を伸ばして4日後に帰ってきて、その翌日だ。シンはヨナの職場ではなくもはや寮に直行したのだつた。

「婚約ですか」

ヨナはしみじみと言つた。

「頑張りましたね、兄さん……」

「ヨナさん、泣いてます

「シン君も潤んでますよ」

2人は再び、実はもう何度目か判らない握手をかわした。

「結婚はいつ……？」

「それがですね」

ヨナは苦笑した。

「上将軍にはまだ届いていない通達なのですが、大将軍の兄のところには届いていまして……私もさつき兄に会つて、知ったのですが」

「？」

「ユエルは近々、国境に大規模な兵の動員を行つそうです」

「戦争という事ですか？」

ヨナは頷いた。

「兄は確実に……そして恐らく、エレイズ殿の軍も動員される事でしょう。それが終わつてから、となりそうですね」

「まあ……あのお二人に何かある事は無いでしょ？」

過信ともいえる言い種だが、これはヨナも同感であった。また戦績を見る限り、ユエルを除いた大将軍の誰よりもエレイズ、そしてウオーレン、ラファインの実力が高い。この戦争が終わつたなら、彼らが大将軍となる可能性さえあると考えていた。

*

ユエルのもとに、国境線の知らせを持つてきたのは王城に仕える文官のダグラスだった。

「それから、ユエル大将軍」

ダグラスは言った。

「お時間はおありですか？」

「ええ、何か？」

ゴエは何となく、ダグラスを好きになれなかつた。まず、その田…
…。暗いともまた違うが、何かを企んでいるもののそれだつた。しかも決して良い企みではないだろうと予想される。口元に貼り付けたような笑みもどこか、詐欺師のようで。信頼の出来ないタイプだつた。

出来ればさつさと帰つてほしいが、礼儀は大切にしなければならない。冷たくならないように心がけて先を促した。

「あなたは、この国の軍部に失望していらっしゃる……やうでしょう？」

ゴエの瞳の色は一瞬にして警戒に切り替わつた。ダグラスもそれに気付いたようだつたが、構わず語り始めた。彼、そして“とある大將軍”の計画……。

「それを、私に手伝えとおっしゃるのか」

「あくまでお願ひです。断つてくださつて結構ですよ……簡単には諦めませんがね」

陽気に笑つたつもりだらうか。しかし、骸骨が笑つてゐるような不気味でかさついた笑い声である。

「私が、この国の軍に失望している。どこから聞いたかは、存じませんがそれは事実です。しかし、私は決して暴力による解決は望み

ません」

「……説得で国が動くとお思いで？」

「国を変える方法は、暴力と言葉だけではありません。私はいずれ、今の上将軍達……ラファイン、ウォーレン、そしてエレイズがこの国の中になつてくれる。そう確信しています。勿論、私もそこに加わるつもりでいます。時間のかかる方法ですが、正しいやりかたで私はレミュールの軍を正しい方向へ導きたい」

ダグラスは短い息を吐いた。

「交渉決裂ですか。しかし、いつかあなたも判るでしょう。この国の救いようのなさにね……。

その時は是非、お声を掛けてください」

「その日は来ないでしょう

きつぱりと笑つたコエは立ち上がつた。

「連絡、」苦労様です。ただちに準備に移りますので

「ええ、失礼します」

コエは、ダグラスの事をヨナやエレイズに教えた方がよいか考えたが。下手に彼らの心配事を増やしても仕方がないし例え、ダグラスなどが直接的な手に出てもどうという事はない、という自負もあり記憶の隅に追いやってしまった。

『国王に進言するにしても、証拠が無いしな』

“とある大将軍”とやらの正体を掴んでからでも遅くはないと考えた。

これが、全ての不幸の始まりである。

7（前書き）

段々、本編の内容と対応してきて番外編らしくなってきました（と思います）。

ダグラスの件もあり、精神的に絶好調とはいかなかつたユ工であるが戦中はいつも通り……つまり誰もが安心感を覚えるほどの冷静沈着な指導と本人の戦闘技術を見せた。その他、動員された2つの大将軍の軍は役に立つたとお世辞にも言えないがユ工の予想通り、上将軍の軍の動きが素晴らしかつた。

上位魔法使いの資格を既に持つてゐる実力だけエリート、出身は平民の上将軍ウォーレンはどうとうアクア・ドラゴンの戦闘動員を可能にしたらしい。ウォーレン軍の矛先からは、悲鳴しか聞こえない。彼が来月の軍事会議を待たずとも大将軍に任命されるのは明らかだ。

また、エレイズ軍は遊撃隊として動いてゐるがそれを本陣営と間違えかねない。使えぬ大将軍達の戦列が崩れ始めればすかさず躍り出て、騎乗して傍らに馬よりも巨大なアイス・ウルフを従えたエレイズ、燃えさかる蠶のフレイム・ホースに跨つた副官リア、召喚獣は従えず相手国「ゴート」……魔法よりも武芸を得意とする国……の一流戦士と見違う程の剣技で敵を圧倒している同じく副官セフィー口がそれぞれ敵軍を一掃する。大将軍達が手柄を奪われたと怒りを覚えるならまだしも、諸手を挙げて喜び挙げ句の果てには不利な戦場を一任して崩壊しかけた敵軍に向かっていく様はかなり情けない。

ラファインの軍も、素晴らしい。奇策を弄するわけでもなければ、ウォーレンやエレイズの軍のように指導者が飛び抜けた実力を持つているようでもないが軍として一番、上手く機能してるのはラファイン軍だ。指揮系統が非常にしつかりしており、各人の実力が総じて高い。近接戦闘も巧みで、魔法国家と近接戦を舐めてかかつた

相手国「一トに動搖を『え』ている。

長引くかと思われた戦は、ものの数日で終了したのだつた。

*

「祝勝パーティ？ 行かない」

エレイズはウォーレン、ラファインと撤収後に顔を合わせたがそう言った。

「俺も行かねーわ。疲れたし……てか、大將軍達役に立たねえ！」

「聞こえるよウォーレン」

エレイズが軽く注意した。

「ユ工大將軍だけだな……。我々がついていくべき力を持った方は」

ラファインまでがそう呟く始末であった。

そこで、エレイズは「あ」と声を出した。

「どうした？」

「うん。ええと、ユ工大將軍と婚約したの

「へえ……な……何いいいいいいいつ！？」「、ここここ婚約つづ
！？」

「親より驚かないでよ」

「ナハカ、おめでとひ」

「ありがとリファイン」

ウォーレンは、戦ではちつとも息を切らさなかつたのに今は盛大に肩で息をしてくる。

「幼なじみの俺はどうしてこうしたー？」

「11の年になつて幼なじみとか言わないでよ。恥ずかしい」

「うがひ」

「副官2人には言つたのか？」

と、リファイン。

「うふ。すぐこ」

「どうせリニアの奴は俺と同じ反応しだだろ」

ウォーレンがやつまつま、

「ううん。涙ぐんで良かつた……って。親みたいだよね」とこう返答。

「動搖したの俺だけ？」

エレイズはあつさり頷いた。

*

- - - side GH

「あなたとはあまり話したくないのですがね」

ユーハは今や冷たい態度を隠そともせらず、招待者を見た。ここはダグラスの屋敷の客間。ユーハの感情とは反対にとても良い天候で、室内はとても明るい。テーブルを挟んで向かい合わせに座っている。

「まあ、お茶をどうですか？ まさか毒でも入っているとお思いですか？」

「いえ」

そう答えたものの、手を付けないユーハを見て努めて明るい様子で肩をすくめた。

「警戒してらっしゃる」

「あなたの所為ですよ」

「やつでした。では」ひしまじょひ

ダグラスは躊躇いもなく、自分のカップに口を付けて一気に飲み干した。

「何なら、そちらも飲み干しましょうか？」

ゴンは少し笑つた。もともとが明るいタチである。陰険に、警戒しあつてゐるのは苦手なのだ。

それに、少なくとも……先口の言い方を思い出せば彼が自分を殺そうとしているとは思えなかつた。

「いいえ、失礼しました」

軽く口を付ける。

「それで、やはつ」の前の話ですか

「ええ、押して駄目なら引つ張つてみようかと」

「あなたの力くらいでは引っ張られませんよ。軍人ですから」

ダグラスは陰気に笑つた。

「まあそりでしちゃう。だから、あなたと腹を割つて話せるくらいに仲良くなりたいのですよ」

「無理でしょ」

「」れは「」れは

その後、ユエは少し驚いたが先日の話には全く触れずにダグラスは政治や軍事への不満をぶつぶつと漏らしていた。大いに同意する部分もあり、ダグラスの考察はなかなか面白かったので、気の乗らない相手ではあるが退屈はしなかった。

「もう一杯どうですか」

「いただきましょう

ダグラスが侍女を呼び、紅茶を注ぐように言った。

侍女がポットを傾けた時……。

不意に、彼女の手からポットが滑り落ちた。高い音を立てて食器が割れる。

「ああっ、申し訳ありません！」

「大丈夫ですよ、そんな慌てないで」

泣きそうになつて平謝りに謝る侍女に、謝られる数だけ「大丈夫」を返して、手伝いまで始めたユエをダグラスは、じっと見ていた。その手は、机の下にて奇妙な……空に文字を書くような動きをしていた。

- - - side ダグラス

その夜、ダグラスは今や通い慣れたとある邸宅に静かに入つてい

つた。

「失礼します」

そこは、ウラティス大将軍の屋敷である。

“とある大將軍”の正体だ。

「どうだつた？」

自分にはワインを、相手には酒を好まないので紅茶を勧めると聞いかけた。ダグラスは不敵に笑つた。王城で仕事する彼しか知らぬ者は一様に驚くであろう表情であるが……これが彼の本当の性質に近い。

「上手くいきましたよ。全く以て、人が好い。仕掛けに利用した侍女の心配までしていいる始末です」

「……味方に欲しかつたものだがな」

「無理でしょう。

彼はともかく……聞きましたか、あのエレイズと婚約したとか」

ウラティスは眉間に皺を寄せた。

機嫌が悪いと、色目を使って近寄つてくる政治家達に政治的難題をふつかけて、答えを諦めた相手に華麗なる模範解答を示す彼女は、実は少し有名である。

「あのエレイズか……身近にあの女がいるとなると、確かに難しい

な

「ええ。しかも、弟はあの最年少王立図書館役員のヨナです」

「参謀長候補か」

ヨナはそう呼ばれている。

ますます、その周囲を含めて味方に引き入れる価値を持つた人物なのだが、その周囲の所為で引き入れる事は不可能なのである。

「あの術は確実に効くのか」

「試験使用ですが……論理に間違いは無いはずです」

「お前が言うのならば大丈夫なのだろうな。……何故、様々な資格を取つてしまわない？」

「私のような者は、舐めてかられるくらいが丁度良いのですよ」

「…………わからんやつだな、いつも通り」

戦後、大規模な人事変更が行われた。大將軍ユエの進言があり、
- - - - これはユエも驚いた事であるが - - - 大將軍ウラディス
も大きな賛成を示したため、ラファイン、ウォーレン、エレイズ上
将軍が大將軍に上げられて3名の大將軍が上将軍に引き下ろされた。

「よつしゃ、エレイズ、ラファイン、飲みに行こうぜー。」

上機嫌のウォーレンが誘つとラファインは感じよくにっこり頷くが

「あ、ごめん」

とエレイズ。

「先約あるから。また今度ね。2人で楽しんできてよ」

「そつか、では次の機会にな」

やわらかく微笑んだラファインに対してウォーレンはちょっと不服
そうにしていた。誰との先約かは判りきっているからだ。

- - - side エレイズ

関係性に名前がついた事で、迷いや不安が無くなつたからかもし

れない。最近ではユエと会う事は純粋に楽しかった。実家にいるときと同じか、もしかしたらそれ以上に心が安らぐ。

「お待たせ」

店員には一つと見つめられながらユエが少し遅れてやってきた。

そんな彼の顔色が悪い気がした。

「ううん、待ってないよ。……大丈夫?」

敬語を使う必要はもう無いといつ事になつたのである。

「実は」

ユエは「うう」とうなづく暫くの体調不良を話した。熱があるわけでも、咳などが出ているわけでもないのだが頭がやけにぼーっとして食欲が出ない。一人でいると、気付けば食事を忘れているほど。

「医者には行つた?」

「いや、だつて症状もないし。……疲れだつから、その内治るよ。祝い事する日に景氣の悪い顔で」「めんね」

「それはいいけど

「心配してくれてありがとう」

そう笑つた顔はいつも通りだったので、レイズはその後はもう特に気にしなかつた。

一週間後、王都近くの城への移動が終わり一段落ついた頃だった。エレイズのもとへ、早馬で手紙が届けられたのは。

「エレイズ様、今よろしくですか」

「うん、入って」

シンがそれを届ける。真っ先に不穏な気配を感じ取っていた彼の顔色は悪く、エレイズも一瞬でその色となつた。

「何があったの？」

「いえ、杞憂ならばいいのですが……田中さんから早馬で連絡が

「田中から急ぎの連絡……」

悪い予感を感じつつ、手紙を開いたエレイズは瞬間に顔を青くする。そして、シンに叫んだ。

「リアとセフィーロ……すぐに捕まらなかつたら、どっちかでもいいから。呼んで」

「どう……」

「エリ……倒れた、って」

シンも同じく青くなつて、退室の礼もそこそこに飛び出した。

「じぱりべ、じにを任せていいかな」

幸い、リアもセフィーロもすぐしゃって来たのでエレイズはシンにしたのよつもう少し詳しく述べてそう結んだ。

「ああ、行つて来いよ。俺達でどうとでもできる」

セフィーロも黙つてリアの言葉を肯定したので、エレイズは

「あらがとう」

と短く言い、城を飛び出した。戦中のようなスピードでアイス・ウルフを召喚するとその背に飛び乗つた。

「ダークヒル城へ」

「あいつに向かあつたのか」

「病氣で倒れたつて」

「飛ばすか」

「よひしべ」

白い巨大な狼は氣合を入れるよつて低い唸り声を上げると風のように駆けだした。

「エレイズ大将軍……」

ヨナまで来ているほどの騒ぎなのである。エレイズは顔色を悪くしたまま、

「案内してくれる?」

ヒ。

「いりがりです、

城の最上階、最深部にある黒いドアを開く。ここがゴンの執務室兼私室である。

「ああ、エレイズ様」

看護士達がエレイズに近づき、説明をする。

「意識ははっきりしてらっしゃのですが、お体の方が衰弱寸前でした。部下の方達に何故気付けなかつたか聞いたところ……」

それを泣き出しそうな面持つで遮つて続けたのはまだ若い、美少年風の騎士である。

「ゴン様は……3日ほど前から誰一人として、御自分のおそばに人を寄せ付けようとしならなかつたのです。まるで、何かを恐れているかのようだ……近付くなの一 点張りで。医師達を部屋へ入れるのも聞いてくださいねえ、ヨナ殿をお呼びした次第であります」

「…………やつ。君は？」

「第一部隊副隊長のクロウと申します」

「説明ありがと、クロウ」

やつ言いひてエレイズは医師の隣に立つた。

「眠つてるの？」

「はい……錯乱状態でしたので、睡眠剤を投与致しました」

「錯乱？」

「まるで何かに取り憑かれたように、我々を見ると暴れはじめる」自身でさえ傷つけそうな有様でしたので、ヨナ殿とクロウ殿が言い聞かせて、少しましになつたのですが。それでもお体の具合を見る事はどうしても許してくれず」

エレイズはしばらく呆然としたように立ち去り、それからゴンの枕元に跪いた。

「ねえ、どうしたの？」

そつと頬をなでてみる。寝顔は穏やかで、その為かエレイズは医師

達の言葉が遠い世界の出来事のように響いていた。

相変わらずに愛する人は美しく、ただ、衰弱寸前だったという言葉通り頬が少し骨張ってしまっている。だが、そんな不健康な様子でさえ彼を美しく見せており、むしろ悲しかった。

「一通り診察致しましたが、お体に異常は見当たらず。もしも、この調子が続くようでしたら精神や脳に詳しい医者に任せらるべきかと

「精神……脳……」

ぼつりと繰り返したエレイズは不意に涙を流した。

驚いたようにした医師に、問い合わせる。

「大丈夫、ですよね？」

大丈夫だと言つてやりたかったが、医師は

「まだ、何も」

と答えるしか出来なかつた。

- - - side リア

「おい、セフィーロ。読んでみるよ」

共にテスクワークを片付けていたリアとセフィーロだが、そこへま

たもや届けられた連絡。リアは一読するとそれをセフィーロに投げつけるように渡した。

「……そうか」

「そうか、じゃねえって」

苛立つたようにリアは言う。セフィーロの事は、強い戦士として尊敬するし同輩としてかなり好きなほうに入る。だが、時々彼の余りにもものに動じない様には苛立つてしまう。

「このまま、もしもユエ大將軍が治らなければエレイズ……大変な事になるぜ」

「判つている」

「なら、もうちょい慌てろよー。」

「俺はエレイズ様がお決めになつた事に従うだけだ」

「……ちえ」

リアは不機嫌さを隠すことなくセフィーロから手紙を奪い返して、もう一度読み返すと放り投げた。

「ユエが本調子になるまで付き添う……問題が生じるようならば、先に大將軍を辞めてから……。あんにゃ」

「エレイズ様は一度こうと決められたら動かぬ方だ」

「判つてら。だから、頭にくんだよ。

……あいつ、自分を何だと思ってやがる」

それに対するセフィーロの返答に、リアは目を驚かせて反論も忘れてしまった。

「の方にとつて今、御自分とは、『レリコトル王国大將軍』ではなく、『ユエの婚約者^{ファアンセ}』なのだろう」「

動搖で体面を忘れたリアから出て来た言葉とは

「や、それじゃあ俺達はどうでもいいって事なのかよ」

だった。だが、セフィーロはそれにもあつさつ答える。

「いや。田頃の方を見ていれば、我々をただの部下とは思われていらない事は明らかだ。しかし……誰にも一番大切な物がある」

「お前、ほんとにセフィーロか？」

「ああ」

リアは自分がエレイズを心配しているのを同じくうにて、セフィーロはエレイズを信頼しているのだと知った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9980x/>

エレイズとユエ

2012年1月10日21時46分発行